

## 《論 文》

## iPS 細胞（人工多能性幹細胞）時代の人間の性と性愛に関する一考察

安 岡 譽 ・ 橋 本 忠 行

## 要 約

2012年度のノーベル医学生理学賞を受賞した京都大学の山中伸弥教授らが開発したiPS細胞（人工多機能性幹細胞）の出現は、従来の人間の性と性愛の概念について根本的な再考を余儀なくされることを予測させた点で、私たちに大きな衝撃を与えている。

そこで筆者らは、まずこれまでの人間の性と性愛について、精神医学と臨床心理学の立場からの理解のレビューを試みた。そのうえで次に、将来に予測される人間の性と性愛に関する概念に大きな変更を余儀なくされる可能性について検討した。

そして、iPS細胞の技術の今後の発展がもたらすと予測される事態と課題は、1) 同性配偶による子の誕生と「処女生殖」（単為生殖）の可能性、2) 男性と女性という2性の概念そのものの変化の可能性、3) 性の精神病理を新たな視点から理解することと、性的障害の診断と治療に関して慎重な判断と対応がせまられること、4) 当面は、家族・家庭の再生と再建がより重要な課題となること、と考えられた。

最後に、筆者らの現時点での人類の未来予測を述べ、若干の考察と私見についてふれた。

キーワード：iPS細胞の時代、人間の性・性別・性愛、性倒錯、性同一性障害、人類の未来

## 目 次

はじめに

## I. 人間の性と性愛

1. 性の発生と愛情の発生
2. 性愛（性欲あるいはエロス）の発達

## II. 人間の性をめぐる精神病理

1. 性と性愛のあり方の偏り
2. 性倒錯について
3. 性同一性障害について

## III. 性と性愛をめぐる問題が注目される現代的背景

## IV. iPS細胞時代の人間の性と性愛は、どのような新たな課題をかかえることになるか？

おわりに

## はじめに

2012年度のノーベル医学生理学賞を受賞した京都大学の山中伸弥教授らが開発したiPS細胞（人工多能性幹細胞）の出現は、さまざまな意味で大きな時代的転換点の到来であり、「コペルニクスの転換」を意味するだろうと言っても過言ではない（注1）。

とくに、人間の従来の性の概念や性愛の位置づけについて根本的な再考を要することを示唆した意味において私たちに大きな衝撃を与えている。端的にひとつの例をあげれば、生物学的視点から原理的には男性の、たとえば皮膚細胞の一片から卵子を、女性の体細胞から精子をつくることが可能になったことである。このことは、同性愛者同士の結婚から人工的に子が生まれる可能性が生じたという、これまでの私たちの常識を覆す事態がおきることを示したことに他ならない。

今日まで私たちは、男性と女性の2性を前提に、人間の性と性愛を巡る諸問題を扱い、ことに精神医学と心理学はその医学的及び心理的問題に対する理解と対応を臨床的に行ってきた。今や、その当否を含め根本的な再検討を余儀なくされていると言ってもよいであろう。

まずもって以上のことを念頭において、本稿では、今一度、原点に立ち戻り、人間の性と性愛の本質について整理し、今後、再考すべき点は何なのかを明らかにし、若干の考察を試みたい。

## I. 人間の性と性愛

人間の性と性愛を巡る問題、平たく言うと、男と女の「性欲」と「愛情」をめぐる複雑な心理的現象と諸問題について、従来の理解を述べる。

性も性愛も、生物学的基盤の上に成立することは自明であるが、ここではとくに人間のこころ（心理）の側面に焦点をあてて考える。

### 1. 性の発生と愛情の発生

地球上での生命発生と生物進化の結果、ヒトが人間となったのは、2性（男、女）の発生、二足直立歩行、道具の使用、脳の急速な肥大化（注2）などの要因もさることながら、「こころ」を発生させ、「人間性」をもつようになったからである。言語の発達や集団化、社会の形成もヒトが人間となった大きな要因であろう。

人間が現れた原始時代は、主に自然環境に依拠した狩猟と採集で生活し、新石器時代とよばれる約1万年前に農耕（牧畜を含む）が始まった。人工的食糧生産である。それによって、それまでの血縁小集団を中心とした分散した生活は決定的に変化を余儀なくさせられた。人間の集団化は都市の形成と、より大きな共同体を、すなわち氏族・部族から民族へ、そして国家のかたちで社会化した。この過程の中で、初期の自然崇拜、アニミズムなどの原始的信仰と「宗教」が発生すると同時に、道具使用による自然環境の人工的改造を基礎とした文化と文明が形成され始めた

のである。

ここで本質的に最も重要なことは、もともと種の保存を目的とするヒトの本能的生殖行為が、その本能としての性質が変質し、人間社会に独特な「性愛の文化」を作りあげたことにある。つまり、他の動物にみられるような自然環境に拘束された生殖過程、すなわち、発情期のみに周期的に生殖行為を行うだけの、本能のプログラミングに従って繁殖を行うのとは異なる行動をとるようになったことである。人間は、ただ単に、種の保存の目的だけでなく、背面位性交から対面位性交への変化で、性行為の快感（オルガスム）を増強させることを発見し、生殖のみを目的としない「性の快楽」だけを強く求める特徴をもつに至ったのである。これが後の、「性の商品化」と呼ばれる売春、ある利益を得るための性行為などを発生させた起源である。

ここでついでにしておくが、他の動物、とくにある種のチンパンジーはオナニーを行い、多くの哺乳類の交尾には「快感」を伴っていることは事実である。ところが、動物園という人工環境に入れられたチンパンジーが一日中オナニーにふけるという、通常自然環境では観察されないことが起きる。これは、動物が特殊な不自然な人工環境下におかれると、通常では起きない「性行動」が生じる興味深い現象である。後に述べる人間の性倒錯の起源にひとつのヒントを与えるものと思われる（注3）。いずれにしろ、人間の性欲は、他の動物の生殖欲とは異なった性質をもつようになったのである。

このように、人間の社会化、文化・文明の発達のもと、自然環境を急速に人工環境に変えていく過程で、本来は生物学的次元（本能）にとどまっていた性愛行動を、良かれ悪しかれ異質化し多様化せざるをえなかった背景がある。それが後に、病的な性愛行動（「性倒錯」）をもたらすことにもなったことは皮肉なことと言わざるをえない。

次に、人間の特徴は、他の動物と違って、こころ（精神）を発生させたことである。他の動物に「こころ」があるかどうかについては昔から議論があるが、ここでは論じない<sup>(1)</sup>。

わかっていることは、人間では、脳・中枢神経系が急速に肥大化し（「大脳ビッグバン説」）、記憶と自発的な「意思行動」が出現し、それに加えて時間（過去、現在、未来という時間軸の概念）と空間を認知できるようになり、思考（認識と判断の整合性の検証と因果関係の照合）の能力がくわり、さらに感情（いわゆる「喜怒哀楽」、とくに愛憎の感情が、もともとある本能活動や快・不快の原則〔快を求め、不快を避けること〕や現実原則〔現実の制限や規則に従うこと〕に複雑に関与すること）が、相互に作用していることである。こころの働きが複雑化することで、こころの世界が出現してきたわけである<sup>(2)</sup>。

もともと動物は本能に従って自然と調和して生きてきたのであるが、人間だけが先に述べたように本能の変質を余儀なくされ、いわば「本能が壊れていく」過程で、自然に適応し調和して生きるために、本能の代わりに「こころ（精神）」をつくらざるを得なくなったのである（「こころの起源」）<sup>(3)</sup>。したがって、他の動物からみれば、人間は「不自然な生き方」をせざるをえなくなったため、「こころ（自我）」を作らなければならなくなったとも言えるであろう。

その人間のこころ（精神）も、いわば「出きたてのホヤホヤ」であるから、まだ不完全で壊れやすく、うまく働かない部分があり、そのため心の病（障害）にかかりやすいという弱点をもっていることは当然である。本稿の主題である性と性愛の問題は、後に述べる性倒錯やいろいろな性的障害の発生も、上述の要因が大きく関与しているのである。

そこで、理解の前提として、2つの有名な心理学的仮説をあらかじめ簡略に紹介しておこう<sup>(4)(5)</sup>。

#### ① エディプスコンプレクス

これはフロイトがギリシャ神話の「エディプス王」の悲劇の物語をもとに名づけた人間が誰でも心の中にもっている心理をさす。

物語を要約すると次のようなあらすじである。

運命の悪戯というか、エディプスは実父とは知らずに父を殺害し、実母とは知らずに母と結婚し、子供までもうけるという人類のタブー（親殺しと近親相姦）の大罪を犯し、後になってその事実が判明し、母親は自殺し、エディプス自身も真実を見抜けなかった自分の目を自らつぶして盲目となり、王位を捨て、流浪の末に悲惨な死を迎えるという結末の物語である。

この悲劇が生じた経緯であるが、テーバイ（テーベ）の王であったライウスは、「汝の子は成人した後、その父を殺し、母を娶るであろう」という神託（神のお告げ）を受け、恐怖し、妻（妃）のイオカステが男の子（エディプス）を生んだとき、その子を山の中に捨て放置して殺すように命じた。ところが、たまたま通りかかった羊飼いが、その子を見つけ、隣国のコリントのポリベス王のところへ連れて行き、その王はエディプスを自分の養子とした。青年に成長した彼に、コリントの予言者も同じ神託を告げた。彼はコリント王を実父と信じていたので父を殺さぬためにコリントを離れ、他国に向かうが、そこで偶然にも見知らぬ実の父ライウスと出会った。道を譲る譲らぬというささいなことで喧嘩となり、ライウスを殺害してしまったのである。その事件の後、当時にテーバイの道をふさいで、旅人に謎を問いかけ、解けない旅人を喰い殺していたスフィンクスという怪物がいた。人々は大変困っていたが、エディプスがそのスフィンクスの出す謎（「スフィンクスの謎」）を見事に解いたのである。ちなみに、その謎とは、「朝は四つ足、昼は二本足、夜は三本足で歩く動物は何か？」というものであった。エディプスは、すぐに、「それは人間だ」と答えた。朝（幼児）は両手両足の四本足、昼（成人）は二本足で、夜（老人）は二本足と一本の杖の三本足で歩く動物だ」というわけである。

謎を解かれたスフィンクスは屈辱のあまり自殺し、それでテーバイの人たちは怪物退治をしたエディプスに感謝し、彼を亡きライウス王の代わりに王として迎え、イオカステと結婚させたのである。はからずも神託が実現したわけである。ところが、その後、テーバイに悪疫が流行し始めた。神託では、「ライウス殺しが悪疫の原因である」と告げられたエディプスは、ライウス殺害犯人を明らかにして町を救おうと誓った。その結果、犯人はエディプス本人だとわかり、その後の結末は先に述べたとおりである。

フロイトは、本人が知らないうちに（「無意識のうちに」）、「親殺し」と「近親相姦」が生じたこの物語から、そうした親子の性愛関係、愛憎関係が、人間の心の中に誰もが発達上で生じる普遍の心理であることを主張した。この理論に異を唱える人もいないわけではないが、しかし、フロイトは神経症者の心理分析と治療経験、およびフロイト自身の自己分析から確信をもつに至っている。

西洋の一神教の世界では父性原理が優位なので、「父親殺し」に力点が置きやすい点がないわけではない。これに対して、東洋、とくに日本では、どちらかという母性原理が優位な文化なので、次に述べる古澤平作による阿闍世コンプレックスの観点からの理解が提起されている。

## ② 阿闍世コンプレックス

これは、古代インドのお釈迦様の時代に起きた物語を基にしたものである。内容については親鸞の『教行信証』にも語られている仏教説からの引用である。

古代インドにあったマガタ国に阿闍世（アジャセ）王子という名の武勇にたけた人がいた。父親は頻婆娑羅（ビンバシラ）王で、母親は韋堤希（イダイケ）妃である。その母親が年をとり容姿が衰え、夫の愛を失うのを恐れ王子を授かりたいと強く願った。すると、ある予言者が、「山にいる仙人が天寿を全うして入滅（死去）した後に、韋堤希の子として生まれ変わる」といった。しかし、その仙人がいつ死ぬかわからないので、彼女は焦り、仙人を早く殺せば王子が授かると考え（彼女のエゴイズム）、実行したわけである。仙人は殺されるとき、怨みとともに、「自分が生まれ変わる王子は父を殺す大罪人になる」と呪いの予言を残した。やがて、韋堤希は身ごもるのだが、予言が怖ろしくなり、その子を堕ろしたいと願い、いざ出産というとき、高い塔にのぼり、産み落として落下死させようと試みた。しかし、その子（阿闍世）は軽傷ですんで死ななかったのである。やがて成人した阿闍世は、釈迦のライバルである堤婆達多（ダイバダッタ）から自分の出自の秘密を知らされ、急に両親に対する怨みと怒りがわき起こり、父を幽閉し、飢死させようとした。韋堤希は夫の命をこっそり助けようとするので、彼は母まで殺そうと考えた。しかし、忠臣のギバ大臣から、「昔から父を殺して王位を奪ったという話は聞いたことがあるが、母親を殺したことはいまだかつて聞いたことがない」と戒めた。結局、父親は死亡し、彼は後悔するが、その時彼は全身の「流注」という腫瘍にかかり悶え苦しんだ。しかし、母親が彼に献身的な看護を行い、また、釈迦と出会い、釈迦が「それは阿闍世のみの罪ではない。阿闍世が地獄に落ちれば、諸仏も皆落ちねばならない」と慈悲をかけられ、ようやく彼は救われたのである。その後、阿闍世と韋堤希は釈迦に深く帰依することになった。

このように、エディプスコンプレックスも阿闍世コンプレックスも、「父親殺しの予告」で始まり、親子の愛憎劇が展開する点は共通している。前者の場合、「母親への愛のために父親を殺す」という欲望を中心においているが、後者の場合は、阿闍世の父の殺害は、決して母に対する愛欲に発しているのではなく、母が自分を殺そうとしていたという怒りに発している点が異なると言え



る。前者では、エディプスも母親も救われないが、後者では、阿閼世も母親も救われる点も異なっている。

また、両コンプレクスには、子の側の心理の前に、親の方に「子殺し」の意図が先行している点は共通している。このように親子関係は、親子双方に愛憎の複雑な機制が相互にはたらいっていることを見逃してはならないのである。

## 2. 性愛（性欲あるいはエロス）の発達

### 1). 性愛の概念

以下の性愛の発達を理解するうえで、必要な前提についてふれる。

まず、愛情（愛すること）についてであるが、古代ギリシャ語の「愛」には、次の4種類があるといわれている。①アガペー（無条件の愛、万人に平等な愛、神の人間に対する愛、人間に望まれる愛）、②フィリア（友愛、愛他的な愛）、③ストルゲー（従う愛、尊敬を含む愛、子供の親に対する愛、弟子の師匠に対する愛）、④エロス（「性愛」や「肉体の愛」を意味し、男女関係の愛、見返りを求める愛）、である<sup>(6)</sup>。

本稿でいう性愛とはエロスのことである。19世紀までは、性欲は成人になって経験されるものと考えられていた。しかし、フロイトは、この考え方に疑問を呈し<sup>(7)</sup>、人間には誕生から性欲動があり、それが乳幼児期から思春期に段階的に発達していくことで、成熟した性愛関係をもつことができると考えたのである。その後、E.H.エリクソン<sup>(8)</sup>は、適切な発達課題を通過することで、幼児期や思春期に経験したことのない家族外の異性対象との間で「親密さ」を体験でき、この親密性によって、就職、恋愛、結婚という人生の出来事に対応でき、充実した人生を送ることができると主張している。思春期の性愛関係、夫婦の性愛関係を考えるうえでも、次に述べる発達過程を理解する必要がある。

性欲と愛情とが結びついたものが性愛であるが、それが結びつかない人間の行動もあり、事は複雑であるが、理論的には、人間はエロスの営みによって、それも成熟したものになることによって、真の人間性が獲得されていくのである。

#### ① 正常な「リビドー」の発達

フロイトは、人間が出生してから成人へと成長する過程を図式化（図1.2）した。彼は、性への欲望を発動させる本能の力を「リビドー」とよび、このリビドーが人間のあらゆる行動の原動力であるとした。つまり、こころを動かすエネルギーであると主張した。そして、そのリビドーがどこに向かってどのように働くかを分析して、人間のこころの動きを理解しようとしたわけである。

図示したように、性愛の発達は、自体愛→自己愛→同性愛→異性愛へと移行する。

ここで重要なことは、第1に、人間は必ずしも各段階を順調に進むとは限らないことである。成人になっても、自体愛、自己愛、同性愛の要素は多かれ少なかれ誰でもこころのなかに残存し

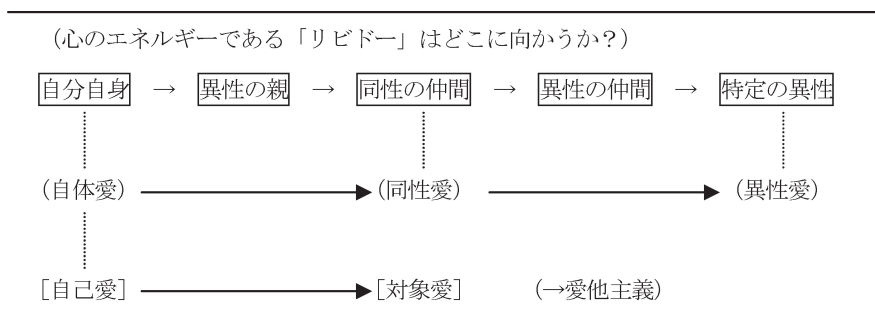


図1. 正常な「リビドー」の発達（発達過程）

自体愛	自己愛	対象愛
自分の身体の一部 に愛着を向ける	自分、自己に対して 向ける愛 (self-love)	対象に対して向ける愛 (object-love)
	自己の表象に対して 向いているリビドー (自我リビドー)	対象表象に対して 向いているリビドー (対象リビドー)

図2. 性愛の発達論（フロイト，S）

ているのである。人によっては、自体愛・自己愛段階や同性愛段階にとどまったままのこともある。たとえ、異性愛段階に達した人でも、心理的な出来事が生じたとき、同性愛や自体愛・自己愛段階に一時的に退行することもよくみられる臨床的事実である。

第2に、人間は幼児期からすでに性欲が存在していて、自体愛、自己愛、同性愛という倒錯的傾向を本来持っていることである。フロイトは、そのことを、そうした「倒錯への傾向は特別なものでなく、いわゆる正常な素質の一部である」と指摘し、成人の性倒錯は、そうした幼児的段階のものが成人となっても残存しているか、何らかの理由で再現してきたものであると理解した。つまり、人間の性愛は、その基本は「倒錯である」といっているわけである。要するに、子供は皆、「多形倒錯者」といえる。その子供がやがて思春期になると肉体は成熟し、性交能力をもつようになり、大量のリビドーが溢れ出て、はけ口を求めるようになる。しかし、社会の「性のタブー」もあり、やみくもに性交へと走るわけにはいかない。「悩ましき思春期」といわれる性衝動の充まりを学業やスポーツで昇華せねばならないが、その際、前性器的リビドーが優勢の場合、後に述べるように性倒錯への道が開かれることになる。

人間の性愛の基本が「性倒錯」というのも、人間の性と性愛を快楽を追求するという面からみれば、快楽を得る対象や方法は何であろうと構わないという性向があつて、一生を通じて人間は

その考え方から完全に離脱できる保証はないといえよう。だからこそ、人間は「こころ」を形成し、その理性の力で自らの成長発達をコントロールする課題が与えられているのだが、それが十分に発揮できるだけの力を人類は現段階ではまだ持っているとはいいがたいのが現実であろう。

## ② 発達の過程

### a) 幼児期（0歳～1歳半）

乳児（赤ん坊）は、生後6ヶ月を過ぎると、母親の乳房からおっぱいを吸うことが、単に空腹を満たす欲求を超えて、唇や舌が乳房にふれることを「性的刺激」として求めるようになる（フロイトのいう「口唇期」）。これが、いわゆる「性欲の目覚め」で、性愛の発生である。この口唇に「性的快楽」を覚える幼時の体験は、後になって成人が飲酒、たばこを吸う、おしゃべりをする、といった口唇を使って満足することと本質的に同じで、心理学的には、母親の「おっぱい」を吸っていることを意味する。それがまさに、成人の一時的な幼児段階への退行の表れの例である。

この時期の愛情対象は母親であり、その愛（「おっぱい」）が得られないと憎しみ、腹立ちが起きるのである。これが愛憎の発生であり、起源である。

### b) 幼児期早期（1歳半～3歳）

この時期には、排尿・排便に快感を覚え、とくに肛門に「性的快楽」を覚えるようになる（「肛門期」）。排便時に、肛門がうずく快感や、排便を我慢する喜びを感じるので、子供がウンチの話に大変興味をもったり、ウンチの話ばかりすることに表れている。

### c) 幼児期後期（3歳～6歳）

この時期（「男根期」）は、①快適な感覚の中心が、口や排泄器官から性器に移り、②子供が同性の親と同一化し始め、③無意識のうちに子供は、同性の親にとって代わりたいことを望む、ことに特徴がある。すでに述べたエディプスコンプレックスの発生である。

子供は、快適な感覚がペニスやクリトリスに触ること（「性器いじり」→「オナニー」）から生じることを発見し、男と女の性的構造の差異（ペニスの有無）に気づく、いわゆる「性差の発見」である。そのため、ペニスの有無で優越感や劣等感を感じたりする。

ところで、先のエディプスコンプレックスとは、子供が異性の親を愛し、同性の親を嫌うという心理があらわれることである。典型的には、男の子は母親を恋人や結婚相手のように愛し、父親には恋敵やライバル、「いなくなればよい」、「殺してもよいほどの存在」と思うほど憎むという三角関係があらわれる。（「陽性のエディプスコンプレックス」）。親子間で愛憎の心理ドラマが展開されるわけである。女の子では、父親を愛し、母親が邪魔で憎むというかたちをとる。また、その逆に、男の子が父親を愛し、母親を憎む、女の子が母親を愛し、父親を憎む（「陰性のエディプスコンプレックス」）こともある。誰もが、それら両方のエディプスコンプレックスを混在して持っているので、ことは複雑になる。確かなことは、このエディプスコンプレックスや阿闍世コンプレックスを適切に解決できず、極端な親子の愛憎関係が生じたとき、後に述べる性倒錯を含む性愛の歪みや障害が発生してくる心理的要因となることである。



## d) 潜伏期（6歳～12歳）

この時期は、性欲に支配されず（性欲が表面的に目立たず潜伏するので「潜伏期」とよぶ）、比較的安定した行動をとり、学業や友人（同性の仲間）をつくることに主な関心を向け、知識や社会性を身につける時期である。この時期をうまく通過できない場合、将来、不登校や「ひきこもり」、異性関係を適切にもてないなどが生じることがある。

## e) 思春期（12歳～18歳）

この時期は、体と心の両方で成長と変化が著しく、課題としては、①体と心の変化にうまく自分を合わせていく適応能力をつけること、②エディプスコンプレックスの克服の時期で、子供が家族（親、兄弟姉妹）との近親相姦的な結びつきを解消して、新しい対象を家族外に発見しなおすこと、である。いわゆる親離れとか自立の方向へ、そして自分に男らしさ、女らしさを身につけ、同性愛傾向から異性愛への移行、将来の生き方の発見（職業選択を含む）する課題をこなす、いわゆる同一性を獲得することが重要となる。

この時期を「性器期」とよび、それ以前を「前性器期」とよんで区別する場合もある。

さて、この時期の発達課題のひとつであるエディプスコンプレックスの克服、解消とは何をさすのかを説明すると、要するに、男子は母親の代わりに外部に愛する女性を発見し、女子は父親の代わりに外部に愛する男性を発見することである。マザーコンプレックスの男性、あるいは、ファザーコンプレックスの女性は、外部に自分の親以上に愛することのできる異性を発見できず、そのため結果的に未婚のまま終わるということも稀ではない。また、この時期に同性と仲良く交際できる能力や機会がない人は、異性と適切につき合う段階に移行することができにくくなることは知っておくべきである。思春期に友人関係を適切にもてない人は、性愛の発達の歪みや障害をもたらすので、早期に予防できるように先手を打って心理的援助をすることが、家庭ばかりでなく、学校教育現場でも必要なことはとくに強調しておきたい。

## Ⅱ. 人間の性をめぐる精神病理

すでに述べてきたように、人間の性をめぐる発達のあり方は複雑で多様である。それだけに、課題達成がうまくいかない場合には、本人が苦悩したり、あるいは家族や社会の人たちも困ってしまう事態が生じることがある。心理学と精神医学では、それを病理現象ととらえ、解決すべき対象としている。その機制を解明しようとするのが精神病理学である。

これから人間の性をめぐる精神病理にふれるが、現代では社会・文化の激変、価値観の多様化に伴い、多くの、とくに、性同一性障害、同性愛、ニューハーフなどについての議論がある<sup>(9)</sup>。私たちは無用の先入観や偏見にとらわれずに、事実を冷静に理解し、知る心構えが何よりも必要であることを予め指摘しておきたい。

## 1. 性と性愛のあり方の偏り

通常、男女の2性があり、性愛は異性間で起きるものをさすが、それらの偏奇、偏りを示す現象がみられる。前者を「正常」、後者を「異常」とみなすのが従来の考え方であった。しかし、事は単純ではなく、正常と異常とを明確かつ厳密に区別できない部分も少なからず存在するので、慎重な検討と判断が必要である。

さて、性愛（性欲）には、精神医学では、これまで量的偏り（「異常」）と質的偏り（「異常」）に2分されてきた。古典的には表1の分類、現在では国際診断分類（ICD-10）の分類（表2）が用いられている。両分類の違いは、後者では「同性愛」の項目が障害から削除されていることと、「性同一性障害」を入れたことにある。今日、同性愛をどう理解するかで再び議論があることは確かであり、今後も検討され続けるであろうし、iPS細胞時代に突入した現在では、より議論が盛んになるだろうと予測される。

以上の事を念頭におき、本稿では、あえて誤解を怖れずに、まず古典的分类（表1）を基に説

表1. 性愛の偏りの分類

I. 性欲の量的偏り
1) 性欲の減退（不感症、インポテンツ）
2) 性欲の亢進（サチリアージス、ニンフォマニア）
II. 性愛の質的偏り（性倒錯）
1) 性愛対象の偏り
①自体愛
②自己愛
③同性愛
④小児性愛
⑤老人性愛
⑥近親性愛（近親相姦）
⑦動物性愛（獣姦）
⑧死体性愛
⑨服装倒錯症
⑩フェティシズム
2) 性愛目標の偏り
①露出症
②窃視症
③サディズム
④マゾヒズム
⑤その他

表2. 最近の分類（ICD-10）<1992年>

(1) 性機能障害（F52）
F52.0 性欲の欠如あるいは性欲喪失
F52.1 性の嫌悪及び性の喜びの欠如
F52.2 性器反応不全
F52.3 オルガスム機能不全
F52.4 早漏
F52.5 非器質性陰痿攣
F52.6 非器質性性交疼痛
F52.7 過剰性欲
F52.8 他の性機能不全
(2) 性同一性障害（F64）
F64.0 性転換症
F64.1 両性役割服装倒錯
F64.2 小児期の同一性障害
F64.3 他の性同一性障害
(3) 性嗜好障害（F65）
F65.0 フェティシズム
F65.1 フェティシズム的服装倒錯症
F65.2 露出症
F65.3 窃視症
F65.4 小児性愛
F65.5 サドマゾヒズム
F65.6 性嗜好の多重障害
F65.8 他の性嗜好症

明を行いたい。それは、比較的理解しやすい点と、同性愛の問題を避けて通ることは適切でない  
と考えるからである。

## 2. 性倒錯について

性愛（性欲）のあり方において、その質的偏奇（偏り）を性倒錯とよぶ。そして、性倒錯は、  
①性愛対象の偏り、と、②性愛目標の偏り、に分けられる。対象とは性愛の相手、目標とはオル  
ガスムを得る方法のことである。

まず、用語上の問題であるが、倒錯とは「正常でない性行為」をさすが、倒錯には「逸脱」と  
いう意味が強く、昔から侮蔑的なニュアンスをもつ言葉なので、「性倒錯」を精神医学では1983  
年から「性的な逸脱」あるいは「パラフィリア」という専門用語を使用している。ただ、心理学  
ではまだ倒錯という用語がよく用いられているので、本稿では倒錯を使用する。

精神分析用語辞典<sup>(10)</sup>の性倒錯の定義によれば、性倒錯とは『『正常な』性行為に比べての偏り』  
とされる。この場合の「正常な性行為」とは、「性を異にする人とのもので、性器官の挿入によ  
りオルガスム（性的快楽）に達することを目的とする性交」と定義されている。つまり、正常な  
性愛とは、本来、心身が成熟した成人の男女間で生じるべきもので、その目標は性器的結合にお  
かれ、性交の結果としてオルガスムをとまうもの、とされている。その定義からの偏り、逸脱、  
変異のすべてが性倒錯となるわけである。

つまり、性愛対象とオルガスムを得る方法が、今述べた定義といささかでも異なる場合、すな  
わち、性愛対象が異性間でないとき（自体愛、自己愛、同性愛、動物性交など）、およびオルガ  
スムを得る方法が性器的結合によるものでない場合（フェラチオ、肛門性交など）、さらに、オ  
ルガスムをある種の非本来的な状況から得ようとする場合（フェティシズム、服装倒錯、窃視と  
露出、サディズム、マゾヒズムなど）、それだけで性的快感や満足をもたらしうるものは、性倒  
錯となるのである。

本稿では、性愛対象と性愛目標の偏りに分けて述べる。

### 1) 性愛対象の偏り

#### (1) 自体愛

自体愛とは、性欲動の対象が他人に向けられず、自分（自己）の身体そのもの、それも身体の  
一部に向けられるものをさす。自分の身体にだけ注目し愛着をもち、そこから性的快感を得る性  
行動を示すのである。多くは、早期の幼時に見られる性行動で、「性器いじり」や「おしゃぶり行為」  
などであるが、その中心となるのは、次に述べる自己愛（ナルシズム）と自慰（オナニー）で、  
同性愛も異性愛も求めないものをいう。

#### (2) 自己愛

これは、人間の性愛の発達過程の中で、自体愛と対象愛の中間に位置づけられる状態である<sup>(11)</sup>。

自分（自己）のみを愛し、他者を愛する対象とみなさず、一般に「ナルシスト」と呼ばれる人が示す状態である。自分を「特別な存在」と思い、自信過剰で、他者には自分を称賛するように求め、他者は自分の思うとおりにふるまってくれていいはずだ、というひとりよがりの「特権意識」をもち、表面的には他者を気にするタイプと全く気にもとめないタイプが認められるが、いずれにしろ、傲慢な行動や態度をとる「自己中心的」なふるまいを示す人である。他者への共感や気遣い、思いやりに欠け、自分の利益のために他者を不当に利用することも特徴のひとつである。

現代社会では、この種の未熟な「自己愛人間」が増えていることが指摘されている。

### （3）同性愛

同性愛は、男性の場合は「ホモ（ホモセクシュアリティ）」、女性の場合は、「レズ（レズビアン）」と略語で呼ばれ、一般によく知られている。同性に性愛感情、性欲を感じることをさすが、実際に同性との間で性行為を行う同性愛や、性対象が同性に限られ異性に対して興味がなく、むしろ嫌悪や憎しみすら抱く場合のみを真性同性愛とよぶ。

一般に、同性愛といってもさまざまな水準のものがある。人間の成長発達過程上、誰もが経験するものから、特殊な状況から発生する「病的」なものまでであるので、慎重に状態を把握し、アセスメント（「診断」）する必要がある<sup>(12)</sup>。

同性愛は、①発達期同性愛、②機会的（代償的）同性愛、③両性的同性愛、④真性同性愛、に分けられる。

発達期同性愛とは、思春期同性愛ともいい、同性への友情や憧れが恋愛感情に転化したもので、その多くは一過性で、やがて異性愛へと発展していくものである。

機会的（代償的）同性愛とは、たとえば、同性だけが生活しているような特殊な環境（刑務所、軍隊の兵営、寮生活、修道院など）では、異性との接触が制限されているために、異性愛の代償として、一時的に同性愛を行うことをさし、通常的环境に戻ると、それまでの同性愛行動が消失するものをいう。

両性的同性愛は、異性にも同性にも性愛行動をとる（いわゆる「両刀使い」）もので、厳密な意味では同性愛とはいえないものである。たとえば、戦国時代の武将には戦場などで近侍させる若者を性愛対象にしていた織田信長や武田信玄の話は有名である。

真性同性愛が本当の意味での同性愛であるが、実際には非常に珍しく、成人人口中の0.8%～2.2%という報告があるほど数は少ない。

同性愛が発生する心理機制については（注4）、いろいろな仮説があるが、一応、次の3つの型に分けられている。これは便宜的なもので重なる部分もある<sup>(13)</sup>。

#### ① 愛情欲求型

これは、母親への愛情欲求の強さ（マザーコンプレクス）があり、母親との同一化が強いタイプのものである。態度や振舞に女っぽさが目立ち、やや大げさな不自然な印象を与える人たちで、臨床的には多くみられるものである。ケースを素描する。

## ○＜抑うつ状態で受診した20代の男性＞

20代の青年が、同級生の男性にふられてから気分が落ち込み、食欲不振を主訴に初診した。話に女言葉をちりばめ、物腰もいかにもなよなよと女っぽく、「うつ状態」にしては多弁気味で矛盾した印象を受けた。話をよく聞くと、幼少期から母親に頼り、いつも離れずにいて、高校まで母親と一緒に寝ていたことを楽しそうに語った。もともと女性に興味をもてずにいたが、大学入学直後に或る同級生の男性が好きになった。その後、その男性の恋人になったかのような気分となり、フェラチオのサービスをしてあげたと語った。その男性にふられたのがショックだったようだった。＜どのような生き方が納得できるのでしょうか？＞と介入すると、「私は母と二人だけの生活が楽しいのです」と語ったのが印象的であった。

このケースは、母親との密着すぎる関係があり、母親から与えてもらいたい優しさを、自分が母親になったように同性の相手に与え、相手が満足するのを見て自分も満足するという心理機制が典型的にみられた例で前田の報告例と酷似している<sup>(13)</sup>。

## ② 受身的女性型

これは、男らしさが発達できなかった人にみられるタイプで、「自分は男であるが、同性を求めざるをえない」と感じていて、孤独で自己主張できない男性に多くみられる。なかには、「異性になりたい」願望をもつ人もいて、女としての立場から男性（同性）を求める場合もある。

## ○＜離婚問題で悩み、不眠で受診した30代男性＞

30代の男性が、入眠困難を主訴に受診したが、「妻と離婚すべきかどうか、どうしたらよいかわからない」というのが悩みであった。男らしい恰幅であるが、対話もとぎれがちで、恥ずかしそうな表情を示した。生活史を聴くと、生後すぐに両親を亡くし、親戚の叔母にひきとられ養育されたという。叔母が支配的な人で、従姉妹たちからは冷たくされ、本人は内気で無口な性格となったと語った。しだいに女性を避け、嫌いとなり、高校時代からある男性に惹かれるようになったが、いつも片思いで終わったという。世間体もあり、結婚はしたものの妻に対して性的魅力を感じずセックスレスであり、離婚を考えるに至ったというのが真相のようであった。与薬による不眠の解消とともに、来院しなくなった。

このケースは、不幸な生育史の中で男性性を獲得する機会に恵まれず、叔母や従姉妹への怨みが女性嫌いに拡大し、そのため同性に惹かれていったという心理機制が中心と考えられた。

## ③ 自己愛型

これは、母子共生関係が強く、自分を男性として意識されず、女性そのものになりきった感覚をもっている人で、同性に積極的に魅力を覚えるタイプである。数はさほど多くはなく、父親が、母親と子供を分離させる力を持っていない場合に起きやすいものである。

後で、三島由紀夫の「同性愛」についてふれるが、彼の場合、祖母との共生関係が強かった点での違いを除けば、自己愛型の要素をもっていたように思われる。

以上の3つの型を、すでに述べたエディプスコンプレックスの視点から説明すると次のようにな



る。

第1には、幼児時代に母子関係で母子相姦的傾向が強かったり、現実には母子相姦に至った場合、本人に強い罪悪感が生じ、成長するにつれて必要以上に母親を避けるようになり、その恐れが母親以外の女性にも向けられ、女性との性愛関係をもつことができず、そのはけ口として、男性（同性）に向うという心理機制が生じることである。この場合、父親が母子密着関係を分離させる力の弱い存在であることが関与している場合があることを忘れてはなるまい。

第2には、父親が強力で威嚇が強すぎて恐ろしい場合、さらに母親との関係で不満が強い子供の場合、男の子は父親に迎合し、愛情を父親から得ようとするため、自分を女性に同一化し、女としてふるまった方が父親（男性）の愛が得られると考えるようになる。そのため、父親ばかりでなく、他の男性にも女としてふるまう同性愛状況が生じてくるわけである。一方、女性の場合、父親に同一化し、母親との関係が悪い子は、同一化すべき女性像が見つけれられないため、成人しても母親像を求めて女性のみに関心をもち、女性の愛を得たいと希求することがある。これらの両方とも典型的な例なのである。

しかしながら、現実の親子関係は、もっと複雑なことが多く、相互に影響し合っているので、同性愛の在り方の水準も、ケース・バイ・ケースで、さまざまなかたちで表れることを忘れてはなるまい。

たとえば、あまり表面化せず「潜伏性同性愛」と呼ばれるケースも多く、このことは、健康な人間にも大なり小なり同性愛的な要因をもっていることの表れであろう。その例として、必ずしも適例とは言えないかもしれないが、レオナルド・ダ・ヴィンチの例をあげてみよう<sup>(14)</sup>。

#### ○＜レオナルド・ダ・ヴィンチの「同性愛傾向」と芸術活動＞

レオナルド・ダ・ヴィンチは、イタリアのヴィンチ村生まれの有名な天才である。父親の家でお手伝いさんの女性との間の庶出の子で、生後、母親とともに家を出され、5歳の時に私生児として父親にひきとられた。幸いにも父方祖母と父親の正妻に可愛がられて育ったが、彼の心には5歳までの実母との思い出が深く刻まれていた。後の有名な「モナ・リザ」の絵は、実母の面影を描いたものといわれ、父親は「長男」レオナルドにはほとんど関心をもたず、レオナルドは思春期に家を出て、アンドレア・ヴェロッキオの工房に入り画家をめざした。その後、多方面に才能を発揮し活躍したことは衆知のことであろう。

そうした彼の人生での特徴のひとつに、何人もの若い男性を弟子にして、自分が母親のように面倒をみたことがある。そのため、当時、本物の同性愛者と疑われるほどであった。その疑いは晴れたのであるが、心理的には、母親的な愛を求め続けたこと、結婚しなかったこと、若い男性の面倒をみ、愛したこと（ただし、性的関係はもたなかった）、などに彼の「同性愛的傾向」の存在は容易にみてとれるのである。しかし、芸術活動や科学的・学問的追求に情熱を注ぐことで、病的な同性愛に至ることはなかったとも解釈できよう。

ところで、同性愛をどう理解するかという点に関しては、多くの議論があることは再三指摘し



てきた。日本人の「甘え」の心理が同性愛的で日本文化の表れだという説もある。また、同性愛をすべて「病的なもの」扱いにしてきた過去の歴史もあり、同性愛者からの抗議が起きてきて、現在では、同性愛そのものを単に病的な「障害」や「発達不全」とみなすのではなく、同性愛者ひとりひとりの心性や人間性、生き方のありようを理解し、受容する方向へと変化してきている。テレビやマスコミで同性愛者が「市民権」を得て登場する状況も日常的になってきている。さらに、同性愛者同士の結婚を認めることも各国で起き始め、広がりを見せていることは確かである。

一般に、他人や社会に迷惑をかけたり、触法的であったり、犯罪的でない限り、誰が誰を愛そうとそれは自由であろう、との認識が基底にあらう。一方で、宗教や倫理感覚的、感情的に異を唱える人たちも少ないとはいえない現状がある。また、明らかに病的としか表現できぬ性倒錯も現実にあることも事実である。そのような中でのiPS細胞時代の到来である。それが提起している人間の性と性愛の問題は、人間の未来にかかわる重大な内容を含んでいるので、再検討が必要であり、その点については後述する。

#### （４）小児性愛

これは、思春期以前の小児（通常は13歳以下）を性愛対象とするものである。男性の小児性愛は、8～10歳の少女を対象とするものが多く、この場合、既婚の中年男性に多くみられる。彼らはオルガスムに達せず、成人女性ともうまく関係が持てなく、多くは人格障害が認められる人たちである。一般に、ロリータ・コンプレクス（ロリコン）と呼ばれ、精神医学では小児性愛者を「ペドフィリア」といい、性的暴行、強制わいせつ、淫行、ときに殺人に及ぶような性犯罪者で占められている。また、本症者の多くは、本人自身が小児期に性的虐待を受けた経験をもったことがあると言われている。彼らは、成人女性をひたすら恐れるあまり、力の弱い小児を選ぶのである。

#### （５）老人性愛

これは、若年の異性を求めず、高齢の異性に対して性的に惹かれるものをいう。この場合相手の条件が限られていて、上品な老人や、反対に汚れた老人を求めるものである。その心理機制は、まだ不明である。

#### （６）近親性愛（近親相姦）

これは、親子、同胞などの近親者との間で性交することをさす。いわゆるエディプスコンプレクスが心の中だけにとどまらず、現実に行動をとってしまうものである。とくに、父娘間が母子子間よりも多いという報告がある。日本でも、たとえば、実父・継父と嫁・養女との間でこの問題がいまだになくなっていないと言われている。

そもそも近親相姦は、古来より親殺しとともに人類の2大タブーとされてきたものである。現代では、親が子に与える性的虐待の問題と関連して注目されている。

#### （７）動物性愛（獣姦）

これは、動物を対象として性的満足を得るもので、その主な動物は家畜である。昔は、多くは農村青少年の代償行為としてみられたもので、獣姦のみが性的満足の唯一の方法となっていたが、

一時的で習慣化するものは少なく、現在では極めて稀となっている。

#### (8) 死体性愛

これは、死体と交接することで性的満足を得るもので、極めて特殊で稀なものである。おそらく生身の異性を恐れ、まったく無抵抗である死体を自分が絶対に支配できる快感を同時に味わえる点では、小児性愛者の心理と共通するものがある。

F.バッシュが報告した例がある<sup>(3)</sup>。新しく埋葬された女性の死体を掘り出していたずらをした男が捕まった。彼の生育史をみると、生後間もなく実母が病死したが、彼は母の病室で幼児の大半を過ごした。母の死後は叔母も重病となり彼にみとられて死んだ。この例に対する岸田の解釈では、彼は母と叔母との関係で何らかのリビドー満足を得た体験をしたり、彼女らの側からの性的な働きかけがあった可能性もあり、死んだ彼女らと死者一般とが同一視され、死体に性欲を感じるようになったのであろうと推測している。

#### (9) 服装倒錯症

これは、性的興奮を得るために、異性の衣服を着用することをさすものである。たとえば、女装をしている時、自慰行為を行い、自分が女性として他の男性を魅了していると空想したりする。次に述べるフェティシズムの意味をもつものが多いと言われている。

#### (10) フェティシズム

これは、性対象のもつ装身具、下着、髪や手足の一部など、それ自体では生命のない物体に過ぎないものや、単に肉体の一部にすぎないもの（刺青や傷跡、肥満など）に対して、性欲が刺激、喚起されたり、性的満足を得ることをさす。フェティッシュ（物神、呪物）とは、文化人類学の概念であるが「魔性をそなえた崇拜の対象」を意味する。その他に、男らしさ、初々しさ（たとえば軍服、乗馬服、裃姿）や切腹の姿や排泄の姿に愛着を示す人もいる。

もともとフェティッシュに全能の力があると考えるのは幻想に過ぎないが、本人はそれに気づいてはいないのである。ただ、断っておくが、フェティシズムが必ずしも性倒錯になるとは限らないことである。フェティッシュは、いわば全能の自己の象徴で、自己愛の投影の対象であるが、それに対してリビドー興奮体験をもたない場合もあるからである。

フェティシズムの事例は、男性がほとんどで、思春期から始まり、そうした物体を集めるのに熱中し、多くは自慰を伴うことが特徴である。そのため、本人は恥や罪の意識をもち、時に著しく苦悩したり、うつ状態や孤独に陥りやすくなる。フェティッシュを入手するために窃盗するもの（下着泥棒が典型的）が多い。また、奇異な性的空想や服装倒錯、サディズムやマゾヒズムなどの倒錯を合併することもある。

フェティシズムの心理機制について、精神分析学派の考えでは、性愛対象を象徴するすべての事物（フェティッシュ）が意味するものは、男性では「母親のペニス」とされる。母親がペニスをもった父親のように、権威的、攻撃的、能動的、支配的などの性格傾向を示すとき、「ペニスをもった母親（男根的母親）」と表現することがある。確かに子供が、「母親がペニスをもってい

る」と空想することは男根期にはよくみられるが、要するに母親が「父親のような怖い存在」であることを「ペニス」という「力の象徴」を意味する言葉で表現しているわけである。男性では、そのために去勢恐怖（「力」を奪われ、脅かされる不安）が生じ、それを克服しようと、「ペニス」、「力」を得ようとすることになる。

一方、女性では父親との同一化から「ペニスを所有すること」と解釈されている。平たく言えば、フェティッシュに本人が期待するものは、両親から自分に力と愛（「ペニス」）を与えてくれないことへの代償としてのものなのである。

したがって、心理機制としては、母親からの分離不安を打ち消すための儀式として理解できるものや、フェティッシュを見たり愛撫することによって、母親との幻想的な一体化を得る試みと理解できるのである。また、フェティストにとっては、フェティッシュがないと不安となり、性的不能（インポテンツ）になることもみられる。

## 2) 性愛目標の偏り

### ① 露出症

これは、見知らぬ人（通常は異性）などに対して、時には公衆の面前で、自分の性器または裸体を露出して見せること、それ自体で性的快感や満足を感じるものをさす。通常では、露出時には性的興奮がおき、一般にその後に自慰を行うものが多くみられる。

露出症は、異性愛的な男性にみられ、その露出場面を目撃者がショックを受け、おびえ、強い反応を示すと、そのことによって性的興奮が充まることが生じる。

露出症の心理機制については、精神分析では、男性の去勢コンプレクスと関係し、露出することで自分のペニスが健在であることを誇示しようとするものと説明している。ペニスは、男性性、男らしさ、力強さ、プライド、自信などを心理的に象徴するものであるため、わざわざ本人がそれを誇示する行為は、実は本人は男としての自信のなさ（去勢コンプレクス）を逆に告白する行為といえる。そのため、露出症者は無意識のうちに対人関係では相手と距離をおき、対等な人間関係をもつことを実は怖れているとも言えるのである。

### ② 窃視症

これは、衣服を脱ぐとか入浴、あるいは性的行為といった私密的な行為をしている他人を、気づかれないように盗み見ることを繰り返すことによって性的満足を得るものである。「のぞき」あるいは「出歯亀」とも呼ばれる行為で、窃視のみでオルガスムが得られる場合もあるが、多くは窃視しながらか、あるいは窃視の直後に自慰することでオルガスムに達する。

本症は、男性のみにみられ、若年より発症し、それ以上の性的行為には及ばないことを特徴とするものである。他人の性行為を窃視するだけに興味を示すものを、とくに性交窃視症とよぶ。

本症者の心理機制として、成熟した一人前の異性と対等な関係をもつことに恐怖をもっているもので、異性を遠くから秘かにながめる以外の行動がとれないのである。

## ③ サディズム (加虐性愛)

これは、性的対象に苦痛と恥辱を加えることによって性的快感を得るものをさす。サディズムは、マルキド・サド公爵の作品にちなんで名づけられた用語である。フロイトは、それが極端な場合、たとえば、痛みや苦痛を相手（人間や動物）に積極的に与え、残酷な目に合わせることで性的快感を得る人々だけを倒錯と呼んだ。その理由は、人間にとってサディズムそれ自体は、性欲動の普遍的な要素であって、人間の心理発達上、一般的には程度の差はあれ誰にでもあるものと考えたからである。

子供が小動物をいじめ傷つけ殺したりして喜んだり、学校生徒の「いじめ」行為や暴力、成人の社会での差別、戦争やテロ行為による殺傷など、あるいは、ドメスティック・バイオレンス、セクハラ、パワハラなども、人間の攻撃性を基盤にし、そうした行為に性的快感を伴う場合は、性倒錯としてのサディズムの表れなのである。つまり、さまざまな攻撃的現象<sup>(15)</sup>の中に、一見そうとは見えなくても、性倒錯が隠されていることさえあることを私たちは決して見逃してはならないのである。

上述のサディズムが生じる心理機制については、男性の性行為の攻撃的・能動的性質が肥大化したものであるという説や、自己の去勢不安に対する防衛であるという説など、いろいろ論議されているが、今のところ明確な結論が出ているわけではない（注5）。

## ④ マゾヒズム (被虐性愛)

これは、サディズムとは逆に、性的対象者から通常は身体的に（暴力、被縛症、被鞭症など）、時には心理的苦痛を与えられることによって性的興奮や性的満足を得られるものをさす<sup>(16)</sup>。『毛皮のビーナス』の作者であるザッヘル・マゾッホの名にちなんでマゾヒズムといわれている。

典型的な例では、苦痛が必要と思われない場合でも、自ら苦痛を求めて得ようとする態度をとることが特徴で、そのため「疼痛嗜好」とか「疼痛愛好」の人ともいわれ、自ら痛みや苦痛を求め、それによって性的興奮を覚える人ということになるのである。

フロイトは、『マゾヒズムの経済的問題』（1924）と題する論文の中で、マゾヒズムを次の3つの形式に分けている<sup>(17)</sup>。

## (1) 性愛的マゾヒズム

これが一般的で典型的なもので、異性に虐待されることで性的満足を得るものをさす。たとえば、夫からの日常的な暴力や残酷な仕打ちを受けたとしても一向に離婚も逃避もせず、周囲の人に不可解で理解に苦しむ印象を与える妻がいる。しかし、実は当の妻は、夫の残虐な行為によって性的快感や満足を得ているので、その「悲劇的状況」こそ妻の望むところなのである。これが本来の性倒錯としてのマゾヒズムである。

マゾヒズムは、男性にもみられるが、心理機制としては、性行動における女性の心理的特性、すなわち異性に服従し、主体の独立性を失うという受動性が病的に肥大したものという説がある。しかし、現代では女性が強くなり、単に女性の受身的弱さからの説明では十分とはいえず、後に

述べる心理機制との複合によるものと考えた方が妥当な例もみられる。

## （２）女性的マゾヒズム

これは、もともと女性の生物学的条件や伝統的な受動的態度をさすもので、痛みに対して無力で受身的であること、自分が幼児のように頼りない子供として扱われたいという願望が基礎にある。

ただ、男性の「女性化」、女性の「男性化」、あるいは「中性化」などを指摘されている現代人の振舞いやあり方の変容をみると、女性的マゾヒズムは、女性だけでなく、男性にも多くみられるようになっている。

## （３）道徳的マゾヒズム

これは、意識的または無意識的に自分を被害者、犠牲者、敗北者としての位置に身を置こうとする傾向をさしたものである。自分の心の中に何らかの罪悪感をかかえていて、その罪を償うために、自己犠牲や敗北、被害を受けることを自ら求めることである。

「罪深い自分は幸福を求める資格はなく、不幸になることこそ自分にふさわしい」と考える人とも言える。「受難が罪の償いになる」という意識的あるいは無意識的罪悪感が働いていて、苦痛や苦難を自ら先取りして自分を罰すること（自己懲罰）で、心のバランスを取り戻そうとする心理機制が働いているのである。

臨床的には、自殺、自傷行為（リストカットと呼ばれる手首自傷、皮膚をかきむしる、抜毛癖など）、仮病、頻回手術症（ポリサージェリー）、故意の偶発事故（事故やけがを繰り返す人）、インポテンツや不感症の性機能障害、それに各種の心身症や神経症性障害にみられる痛みや障害、病変など、という症状や行動で表れる<sup>(18)</sup>。

マゾヒズムの心理機制は、先に述べた説もあるが、まだ未解明な部分も残されている。

ここで、よくみられるケースをあげよう。

### ○＜抑うつ状態で受診した20代後半の高学歴女性＞

不眠、無気力のうつ状態となり自分は普通ではないと考えて、ある女性が受診した。国立大学出の優秀な人で、一流会社に勤務している。心理療法の過程で明らかになったことの中で注目されたのは、彼女はこれまで3人の交際男性がいたが、いずれも社会的には仕事をせず、「遊び人」や「ヒモ」生活を送る人々であった。そうした彼女の不思議な異性選択の理由を探求し話し合った。すると、彼女が語ったことは、両親が病弱で、一人の妹は生来の身体障害者で、そうした家族の不幸な部分を見て、自分だけが健康で幸せでいることにいつも後ろめたい気持ち（罪悪感）を覚えている事実であった。それで、どう考えても彼女を不幸にしかしない男性を無意識に選び、自分も他の家族と同様に不幸になることによって罪悪感から逃れようとしていたことに彼女が気づいたとき、「あなたが幸せであり、より幸せになることこそ、家族のみなさんの喜びであり、幸せにすることになるとは考えられませんか？」と指摘した。じっと考え込んでいた彼女は理解できたようであった。約3ヶ月で面接は終結したが、2年後たまたま彼女にお会いする機会があっ



たが、彼女は立派な男性と結婚し、幸せな生活を送っていると元気に話してくれたのである。

このように、放置しておく不幸な生活をわざわざ送っているとしかみえない人はよくみられる。こうした、必ずしも病的とまでは言えないマゾヒズム傾向は、このケースをみれば、誰にでも多少は見られる種のものであろう。

#### ⑤ その他

##### (1) 放火狂

放火をして火が燃え上がるのを見て、性的興奮が起き、射精する人がいる。それ以外の性的満足の方法を知らず、現実の女性に興味をもてないことが特徴的である。

##### (2) 窃盗狂

物を盗んだ瞬間にオルガスムに達する性癖をもつ人をさす。

ただ、上記の放火狂も窃盗狂も、必ずしも性倒錯とは限らない例も多く存在することがあるので注意を要する。

以上、古典的な分類に基づいて紹介してきたが、ICD-10の新分類も名称や分類法の違いはあれ、本質的に極端な差異はない。しかし、現在、日本でもICD-10の分類を中心に考えられていて<sup>(19)</sup>、そこで注目されている性同一性障害についてふれないわけにはいかないので、次に述べることとする。

### 3. 性同一性障害について

かつてフロイトが強調したことは、人間は両性具有性であること、すなわち、男女ともに心理学的には、男性的ころの部分と女性的なころの部分の両面をあわせもっているということであった。男にも女性的な面が、女にも男性的な面があるということである。この考えは、後に批判されたが、最近では性同一性障害との関連で新たな現代的視点から再評価されている。

性別 (gender) とは、出生後に分化する心理・社会的な後天的な性 (sex) をさし、家族・社会・文化的要因によってつくられるものをさす。自分が男である、あるいは女であると意識したり認知するのは、そうした諸要因によって後天的につくられる部分があるということである。

性同一性障害 (あるいは性別同一性障害) は、①中核性別同一性、②性別役割、③性対象選択、の3つの構成要素からなる。とくに、中核性別同一性とは、自分が男性 (あるいは女性) であるという自己認知に対する基本的確信をさす。これは、生後18ヶ月から2,3歳までに確立し、(それも、とくに出生児の性の認定と命名、言葉の話しかけなどが重要な意味をもつとされるが)、それは一度形成されると、それ以後どのような外的環境からの刺激によっても修正や変更が難しいことが諸研究から明らかとなってきたのである。男 (女) として生まれても、幼児早期に自分を女 (男) として感じてしまうこと、すなわち、身体的な性 (sex) と心理的・社会的な性 (gender) が一致しないことが生じると、それ以降、修正困難な性質をもつことがわかってきたのである。



このように、こころと体の性が一致しない障害を性同一性障害と呼ぶが、この不一致の程度には個人差があり、確信に満ちたものから、ぎこちない違和感を感じる程度まで、さまざまなのである。典型的な場合では、幼少時から身体的な男児（女児）が、身体的な女児（男児）の好みや行動を示し、成長するにつれて、女性（男性）として生きていくことを目指すのである。

この障害の要因は未解明であるが、医学的には、胎児期のホルモン異常説が推定されている（注6）。また、生育環境要因も関与していると考えられている。

この障害の発現頻度や男女比については、調査困難なこともあって正確なところは把握できていない。ただ、2011年の厚生労働省の調査では、国内の障害者数を少なくとも4000人と推計した。ところが、北海道文教大学の池田官司教授（精神医学）らの札幌市の最新調査（2013年）によれば、約2800人に1人の割合と推定され、それを全国にあてはめると、全国に約46000人となりかなり多くの悩める障害者が存在すると考えられる。

この障害の治療的援助としては、現在のところ心理療法（カウンセリング）、ホルモン療法、性別適合手術などがあり、可能な限り本人の苦悩を軽減させると同時に、本人の意思を尊重する方向での対応が試みられているのが現状である。

ところで、性同一性障害は同性愛とは違う点がある。同性愛は、同性を性愛対象として求めるが、性同一性障害は、相手の性ではなく自分の性に対する違和感を問題にしているからである。しかし、その違和感の結果、同性愛への道を進む例もみられるので、両者が別個で無関係なものでなく、関連してくることも事実であろう。そういう意味では、単純な医学的分類では本質を理解するのに限界があるのである。

そこで、多くの研究者が著書や論文で考察している例として、三島由紀夫の「性倒錯」を紹介してみよう<sup>(20)</sup>。

#### ○＜三島由紀夫の「性倒錯」＞

有名な天才の作家である三島由紀夫は、「同性愛者」としても有名であった。彼の生い立ちは奇妙なものだった。生後間もなく、実母から離されて祖母の部屋で育てられたのだが、支配的な祖母は彼に女の着物を着せ、女の子のように育て、友達として近所の数人の女の子しか与えなかったのである。それで、彼は中学まで女言葉がぬけず、男らしさを周囲に感じさせない印象を与えた。一方、詩や文学に才能があり、東大に入るほど優秀な頭脳の持ち主であったので、自分が男にもかかわらず4歳の時から男に魅力に感じるようになったこと（自伝小説『仮面の告白』）に、彼は内心では違和感を覚えた筈である。後に、彼は「男性性」を取り戻そうと、アスレチック、剣道、ボクシングなどで体育会系の筋肉増強に熱中した。しかし、自分の心の内の「女の意識」の部分は終生消えなかったもので、結局のところ、彼は自分の中の「女」の部分除去するには、「自殺」というかたちでしか消すことができないことに気づいていた。自衛隊内での割腹自殺しかとれなかったことは、心理的な意味で悲劇的としか言いようがない。

先に、幼児期の育てられ方で、男か女かの性別の意識が決まると述べたが、彼は、体と心の不

一致が生じ、その矛盾に悩むことになったのである。明晰な頭脳の持主だからこそ苦悩は深刻で、必死の格闘を要したのであろう。文学や芸術での活動も限界がみえたとき、死の選択しかなかったと解釈すべきであろう。彼に幼少期の事態の責任はない。幼少期がどうであったかで後の、性同一性のあり方が方向づけられることが、すなわち、男性性、女性性を確立することが、意外に難しいものであることを、彼の例が私たちに教えてくれていることを忘れてはなるまい。

### Ⅲ. 性と性愛をめぐる問題が注目される現代的背景

これまで、人間の性と性愛をめぐる諸問題について述べてきた。それが現在、注目されるようになってきた要因について検討したい。

#### 1. 性的障害の増加

先に、性倒錯と性同一性障害について主に述べてきたが、とくに表2に示したように、性機能障害の増加も大きな問題である。

性機能障害は、性欲の欠如や嫌悪、オルガスムを感じにくいなど、「性的不能症」や「冷感症」をもたらし、多くはセックスレスの関係をもたらしている。それらは心理的要因が大きく関与し、性愛行為の不全は、性や性愛そのものへの恐怖が心理機制として働き、その基底にエディプスコンプレックスが問題となるケースも少なくない。また、それが一部には「不妊症」の問題として表面化する場合もみられる。

現代では、性や性愛に関する知識や情報がマスコミを通じて氾濫している割には、正しい性知識や性病、エイズにさえ無知である人たちが、とくに若者に情報過剰と無知とが併存し、適切な性行動をとれないものが多いことに驚かされる。

このような人間の性をめぐる混乱と歪みの増加には多くの要因が絡んでいる<sup>(3)</sup>。

第1に、人間（人類）をとりまく自然環境条件と社会環境条件の悪化の進行である<sup>(21)</sup>。人工的社会環境の急激な進行が、動物の性行動に異常をきたすことは、すでにふれたが、視点を逆にとすると、人間自身が自ら不自然な人工環境、すなわち「動物園」をつくり、そこに住むようになったともいえる。そう考えると、人間の性を含めた本能が壊れ、歪んでいくのも当然の現象といえよう<sup>(3)</sup>。人間の目先の利益優先の経済活動（注7）が、自然を破壊し続け、それがもたらしたものは、地球温暖化、異常気象、森林の減少と砂漠化の進行、公害となる異常物質の放出（ダイオキシン、有機水銀、カドミウム、環境ホルモン、原発事故による放射能、PM2.5など）、それらが、結局は、性的障害や歪みの要因のひとつとさえなっているのではないかという議論さえある。

第2に、上記に加え、民族紛争や宗教対立戦争やテロ行為、内戦など、深刻な心理的ストレスを与えている。その事実を目を向けるものも、目をそらすものも、同じく人間の未来に希望をもてず、人類滅亡の予感や不安をかかえている点では同様である。そのため、現代人は、せめて利

那的で一時的なものであれ、目先の欲望や欲動、快樂追求に走らざるを得ない心理状況に追いつめられているのである。

この心理的要因が、さまざまな精神病理現象を増加させているわけだが、性的行動の偏り、性的障害は、そのひとつの表れにすぎないのである。

第3に、ここ数十年間で、異常な人口の急増を忘れてはならない。その重大性は認識されながらも、有効な対策に人類は失敗している。そのため、人類自身が地球の生態系のバランスを破壊し、他の生物に絶滅種や絶滅危惧種を増加させている。さらに重大なことは、食糧生産やエネルギー確保のために、人工環境化や自然破壊を促進する「経済活動」を肥大化させ、それがまた人類の心身に悪影響を与え、人類滅亡の危機をもたらしかねない悪循環をひきおこしていることである。

第4は、上記のことと密接に関連しているが、人間のこころ（精神）の脱道徳的劣化と、家族・家庭という社会の基本単位の崩壊現象の進行である。

現代は、都市化と核家族化、少子化、高齢社会に変化している一方、すでに述べた快樂追求主義や利己主義、金銭至上主義や格差社会（貧困層の増加）、弱肉強食社会への退行（福祉の後退）、学校教育現場での「いじめ」や道徳性の低下、偏差値優先の教育やモンスター・ペアレントの出現など、思いやりや人間性に欠けるぎすぎすした人間関係が増加している。そうした競争意識や被害意識、倫理性欠如を生み出している時代精神が、家庭や家族関係にも波及しているのである。

家族内の人間関係の希薄化、分断化を背景に、離婚や貧困、差別、暴力や虐待、家出などが増加する家庭の解体現象が進行している。さらに、それにとどまらず、家族崩壊現象（自殺、麻薬や覚醒剤、アルコール依存、買物依存などの依存症の増加、窃盗、傷害、非行、殺人、性的逸脱行為（「援助交際」「売春」「不純異性交遊」など）も一層進行している<sup>(22)</sup>。

上述の諸状況によって、家庭で子供が健全に育ち、エディプスコンプレクスを克服することが困難となり、それらが性愛行動のあり方に影響を及ぼし、性倒錯や性同一性障害、性機能障害などの性の歪みを生み出す要因となっているのである。

## 2. 性の歪み（性的障害）への対策

人間（人類）のおかれた現代的背景が、人間の文化・文明、宗教や思想、民族や国家、それに政治や経済のあり方、すべてに関連した歴史的産物から成立し相互に影響しあっているので、私たちがとりまく状況は複雑で困難な多くの要因から影響を受けているものであることは自明であろう。

したがって、性的障害に限って考えてみても、背景要因を分析して総合的な視点から理解と対策を考慮せねばならない。とはいっても、何事も人間のなせるものであるから、最終的には人間に依拠した対策しかないこともあきらかであろう。

第1に、何よりも家庭や家族の再生、健全化が必要であろう<sup>(23)</sup>。それには、現在進行してい

る深刻な事態をまずもって直視せねばならない。そして、人間の理性と道徳に依拠せねばならない。ここでいう道徳とは、①人を殺さない、②嘘をつかない、③盗まない、の3条件を最低限守ることである。また、貪欲な欲望の行動化を抑制する理性を強化することである。また、理性とは、人間ひとりひとりが謙虚になり、他者への思いやりを持つことである。もともと、人間は「無力さ」と「不安」をかかえた、かよわき生物として地球上に発生し、自然の中で育てられ今日に至っている筈である。しかし、文化、文明、科学技術を発展させるにつれて、あたかも人間は万能の生物で、自然界や万物の頂点に立ち万物支配できるかのごとき「傲慢さ」を身につけてしまった。そのことへの反省、内省をすることを先ずもってすることである。それにくわえて、人間の性欲動のコントロールを身に着ける努力をすることである。具体的には、まず人口の異常な増加に歯止めをかけることである。人間だけが、地球上の約290万種の生物の中のひとつの種に過ぎないのに、この小さな地球に異常繁殖し続けること自体、生態系の破壊を促進させ、結局、人類そのものにツケがまわってきて自らの滅亡を導くことは明らかだからである。次に、人類を生み出した自然環境を破壊することも人類の自殺行為であることを自覚することである。つまり、人工環境化への暴走に歯止めをかけることが必要なことも論じるまでもなからう。

ところで、物事には貨幣の両面、表と裏があるように、次のことが言えるかも知れない。これは誤解をうむ危険を承知で指摘することだが、「性倒錯」とくに「同性愛」の増加は、人類が人口増加による人類滅亡の歯止めとして無意識的に選択していると結果的には考えられる側面はないか、ということである。というのは、同性愛の増加は、従来の「種の保存」の原則に逆行し、人口減少を促進させる一要因と考えられるからである。同性愛同士の結婚から子は生まれないのはこれまでの生物学の常識だからである。

しかし、iPS細胞の出現は、当面は医療面での画期的展望を開いたが、将来、同性愛者同士の結婚からiPS細胞の技術で子供が生まれる可能性を生み、本当にそうした事態になれば、私たちのこれまでの「常識」は簡単に覆されることになるだろう。現在、問われている問題の焦点のひとつはそこにあるので、次にそれについて論じよう。

#### Ⅳ. iPS細胞時代の人間の性と性愛は、どのような新たな課題をかかえることになるか？

##### 1. 同性配偶による子の誕生の可能性と「処女生殖」の可能性の出現

山中教授らグループが作り出したiPS細胞は、どのような細胞にも分化できる「分化万能性」を持ち、人間自身からその細胞をつくる技術が確立されれば、拒絶反応の無い移植用組織や臓器の作成が可能となる。つまり、医学医療の分野で難病の治療や創薬への期待が高まっているのである。それは望ましい進歩であろう。

一方、若原によれば、iPS細胞は、精子や卵子のもとになる始原生殖細胞を作り出すことに、マウスの実験ですでに成功させている（京都大学の齊藤通紀教授のグループ）。さらに、ヒトの

iPS細胞をもとに始原生殖細胞を作り出すことにも成功している（慶応大学の岡野栄之教授のグループ）。したがって、iPS細胞の技術を使えば、理論的に精子と卵子を作り出すことが可能である。とくに、男性から卵子、女性から精子を作るのも可能となる<sup>(24)</sup>。

ということは、「同性配偶による子の誕生」という生物進化史上、ありえない事態が起こり、従来の自然界における性の概念が決定的に変更を余儀なくされる可能性が出てきたのである。さらに男性、女性のそれぞれ個体の皮膚細胞から精子も卵子もできるとすれば、女性の場合「処女生殖」（単為生殖）も現実化することが原理的に可能とさえなる。

もっとも現在は、文部科学省の倫理規定で人間の精子・卵子を人工的に作り、それを受精させて人間を作り出すことは禁止されている。しかし、技術的には、いつでもそれができる時代を迎えたことは間違いない事実である。

そこで、同性愛者同士の結婚により（注8）、かりに両者が子を望んだとき、一方からは精子、他方からは卵子をつくり、男性同士の場合はほかの女性の子宮で「借り腹」によって受精卵を育て子を生むことになる。女性同士の場合は、どちらかの本人の子宮でそれが可能となる。

もちろん、そういう事態は近未来的には現実化しないであろうし、またそうして生まれた子が果たして「正常な人間」として生育できるかどうかとも保障の限りでないと生物学者は考えていて、そのことの限界性や危険性も考慮せねばならぬであろう。しかし、人間は上記の可能性に「挑戦」する「実験」を行うことを想定しておかねばならない。それは、核分裂の莫大なエネルギー発生を発見した人間が、結果的に原爆や水爆を作ったという実例をみれば想像がつくであろう。「神」は容易に「悪魔」になるのである。

## 2. 男性・女性の2性の概念の変更の可能性

地球上の生物は、進化の過程で2性（雄と雌、男と女）を生み出すことで、種の保存能力と自然適応能力を高めてきた<sup>(25)</sup>。

ところが、最近の遺伝生物学の知見によれば、性決定遺伝子であるX染色体とY染色体のうち、男性（XY）を生むY染色体の大きさが徐々に縮小の傾向を示し、将来、消失し、男性が生まれなくなり、女性（XX）だけの世界になるのではないかという予測仮説をもつ生物学者がいる（注9）。つまり、男が徐々に消滅の方向に向かい、やがて男が必要でなくなる世界、すなわち、「女だけで子をつくる世界」の到来である。にわかに信じがたい予測と思われるが、かりにそれが生じると仮定すれば、現在の「男と女の世界」という2性の考え方は将来成立しなくなることになるだろう。

極端な空想が許されるなら、人間に「性欲」あるいは「性愛」と、その対象さえも制限され、変容していく世界ということになるだろうか。そうなると、将来の男と女の「性同一性」の概念、「父親・母親の役割」の考え方、「親子関係」のありよう、「結婚」や「家族」という概念も質の変化がおきる可能性があるだろう。また、両親と子の三角関係を前提とし性と性愛を理解してきた「エデ



ィブスコンプレクス」論も「阿閼世コンプレクス」論も、その意義が薄れるか、変更を余儀なくされる可能性すらあるかもしれない。

そのとき、人間のこころのありようは、どのようになっているであろうか。

余りにも空想のしすぎで、単に訳のわからぬ世界を想像することの誘惑にのせられていて、冷静さを欠いている部分があることを著者らは自覚している。しかし、iPS細胞の出現は、私たちにそれだけの衝撃を与える価値があることだけは間違いはないと考える。

### 3. 性と性愛に関する精神病理、いわゆる「性的障害」は将来、どのように変容するか？

この問いの課題について現在、述べることは不可能である。その理由は、iPS細胞の技術を性の領域に適用することは当分は禁止されているからである。そして安易に適用できるとは考えられない。したがって、すでに述べた性的障害の分類と機制についての理解のもとに、より適切な治療や援助について私たちは探求し、解明し、対応する責任を果たすことに当面は専念するだけである。

しかし、遠い将来であることとしても、適用が許可される事態となれば、従来とは異なった病理現象が起きることは否定できないであろう。著者は、いくつかの予測仮説をもっているが、本稿で述べるのは差し控えておくのが穏当であろう。将来のことは、将来の時点で論議すべきものと考えからである。

確かなことは、現在においても、さまざまな条件下で、性的障害は影響を受け、人間の性の意識も変容しつつけている。したがって、今後の推移を臨床的によく観察して、熟考し理解を深めておくことが、将来の予測を正確なものに近づけるということを強調するにとどめておきたい(注10)。

### 4. 家族・家庭の再生の課題

iPS細胞の登場がもたらすであろう可能性について一定の示唆を行い、それを視野に入れながら、現時点で私たちが為すべきことは、人間の性と性愛の発達を保証し、性的歪みを予防するような家族・家庭の再生、再建という当面の課題への取り組みである。iPS細胞時代に突入したからこそ、私たちは原点に立ち戻る必要があるのである。このことは強調しておかねばならない。再三指摘してきたように、人間の理性と道徳の回復に依拠することによって、すなわち、知性によってのみ諸問題の解決する余地はまだ十分に残っているからである。

## おわりに

宇宙の未来については、いくつかの説があるが、確実なことは約50～70億年後には太陽系は滅亡することである。一説では、約5億年後の地球環境は表面温度が400～500℃になるという。



いずれにしろ、人類が生き延びることを欲するなら、全宇宙に100万個はあると推定される生存維持可能な星への移住計画を実現せねばならないことになる。その星の発見と移住手段のための科学技術の発展こそ不可欠である。

そのためには、人類が地球上で行っている現在の愚行を止め、環境改善と平和共存の確立と将来の移住計画の実現のための科学技術の真の平和的發展とを人類の共通目標として、全体が全力を尽くすことを早期に開始せねばならない。愚劣な内輪もめをしている時間的余裕がないことを明確に認識する必要がある。真摯で謙虚な、かつ理性的な洞察が要請されているのである。

上述のことを前提に、人間の精神を進歩させ、性愛問題を適切に解決しない限り、人類はただ滅亡を待つだけの愚かな存在でしかないことになる。

空想を言わせてもらえば、何百世代か何万世代かかるのかわからぬが、宇宙船で生命（「現代のノアの方舟」）を他の星に移住するとすれば、生命と種の維持に、iPS細胞の技術が「必要悪」として利用せざるをえない事態があるかも知れない。いずれにしろ、私たち人類の未来は、私たちが未来をどう展望するかにかかっているし、人類はその知恵を発揮できるであろうことを信じていたい。

#### <注釈>

注1）私たちの体は約60兆個の細胞からなるが、私たちが死ぬと、それらの細胞はすべて死ぬ。ところが、「死なない細胞」つまり「不死ともいうべき細胞」を人工的に作ることに成功したのが、「iPS細胞」である。

京都大学の山中伸弥教授らが、まずヒフの細胞を取り出して培養し、その細胞にOCT3/4、SOX2、KLF4、C-MYCという4種類の遺伝子を導入して、iPS細胞を作り出すことに成功した。それが、その後の処理により、心臓・腎臓・筋肉・神経などさまざまな細胞に分化できることが確かめられた。

このiPS細胞は、精子にも卵子にもなることも確認されたので、「不死」の細胞である。人類の今後の「性」を考えるうえできわめて重要なのは、その点なのである。

注2）この脳が急速に肥大化したという「大脳ビッグバン説」の他に、「幼児成熟（ネオテニー）・早産説」がある。これは、猿が胎児のまま早産して、そのまま成熟して猿にならず、ヒトとして成長進化できたものとする説である。

注3）動物園では育児放棄する動物が現れるのも、自然な本能の変質あるいは崩壊のあらわれであろう。

注4) 同性愛の発生の機制を考えるヒントを与えるものとして、昔の東ドイツでの社会学的調査が有名である。1942年から1945年(第2次世界大戦中)と1947年と1948年(大戦後)に生まれた人たちに有意に同性愛者が多かったというデータである。比較として、1940年以前と1948年以降に生まれた人たちには同性愛者は少なかった。この結果から、過酷な戦時下の強いストレスを受けた母親から生まれた男の子に同性愛者が多いという事実は、(注6)に述べることと関連して考えると注目に値する。

注5) 生物学的視点から男女差をみると、若原正己博士の指摘によれば、男性は、①すべての年代で死にやすい、②殺人による死亡例が多い(ちなみに、野生動物でもオスが死にやすい)、という特徴がみられるという。その理由として、1) X染色体説(男はX染色体が1本しかなく、異常な遺伝子が発現しやすいため)、2) アンドロジェン説(男は自分が出す男性ホルモンのアンドロジェンによって攻撃的になりやすく、喧嘩、殺人、事故、病気をおこしやすいため)、をあげている。<sup>(24)</sup>

注6) 「アンドロジェン・シャワー」という現象がある<sup>(25)</sup>。これは、男胎児のアンドロジェンの血中濃度が妊娠10週目頃から上昇し、14週でピークに達するもので、その量は成人男性の血中濃度に匹敵するほど膨大である。(第1次アンドロジェン・シャワー)。さらに、生後2ヶ月あたりにもう一度大量のアンドロジェンの分泌がみられる(第2次アンドロジェン・シャワー)。この2度にわたって放出される男性ホルモンによって男として成長できるのである。これが何らかの理由で異常をきたすと、性の発達にさまざまな影響が生じる。つまり、女性

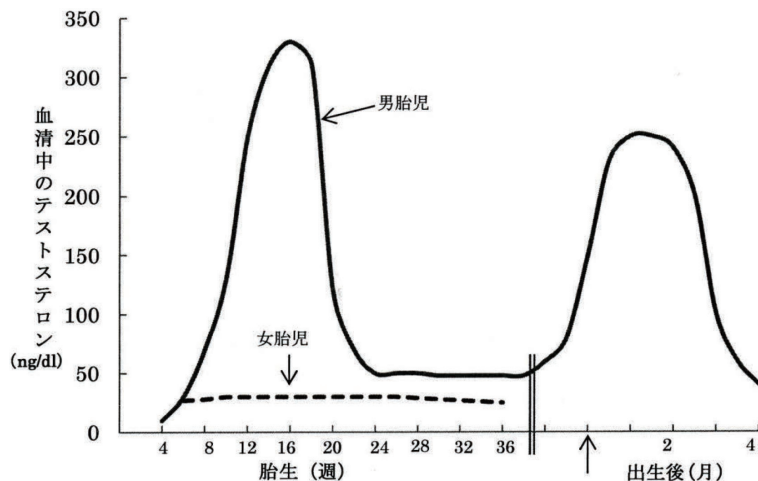


図3. ヒト胎生期と新生児期のアンドロジェン分泌

胎生期の4か月ごろと新生児期の2か月ごろに、男児の体内で大量のアンドロジェンが合成されて、分泌される(荒井康充著『男と女の脳をさぐる』, 東京図書, 1986年, 64頁の図より改変)。

と違って男は簡単に男になれないのである。このことから、同性愛や性同一性障害の発生の生物学的機序のひとつと考えられる説の根拠となっている（図3を参照のこと）。

注7）ある有名な日本の心理学者が、宗教問題のからみで、ある欧米人に「神の代わりに、今は何を神としているのか？」と質問したところ、「それは、お金だ」と答えたという。現在の、金もうけのためには何をやってもよいというモラルハザードをおこす確信に満ちた行動をとる人たちは、「お金を最高神とする新興宗教の信者たち」と考えるとわかりやすいかも知れない。その「信者たち」が狂奔している姿をみると、過去の「オウム真理教」騒動を起こした人たちを思いおこさせる。

注8）同性同士の結婚を法的に容認する動きが広がっている。2014年3月現在、米国では首都と13州で、その他、15ヵ国（オランダ、ベルギー、スペイン、カナダ、南アフリカ、ノルウェー、スウェーデン、アルゼンチン、ポルトガル、アイスランド、デンマーク、ウルグアイ、フランス、イギリス）で同性婚を認めている。ちなみに日本では憲法24条の規定で同性婚は法的に認められていない。

注9）これは、オーストラリアのグレース博士の説である<sup>(26)</sup>。もともとX染色体とY染色体の大きさは同じであったが、進化の過程でY染色体だけがだんだん短くなってきて、今後約1400万年後には消滅するという予測である。要するに、「哺乳類のオス絶滅説」で、オス（男）がいなくなる可能性である。この説の当否に議論はあるが、皮肉なことを言えば、あと1400万年後まで人類が生存しているかどうか保証の限りでないので、論議自体無意味かも知れない。

注10）iPS細胞の技術が、人工的に精子、卵子をつくりだし、かりにそれが人間に応用することが容認される時代となれば、すでに動物では成功している「クローン動物」と同じ「クローン人間」が出現するであろう。最初に述べた、同性婚同士から子も生まれるであろう。極端に言えば、iPS細胞が作られたため、人間の「男と女」の区別がなくなり、理論的には、「女」ひとりで生殖が完結できるので、最終的に「男」が必要なくなる世界である。「性同一性」という「男であること」「女であること」の区別と内容すら無意味となる世界は、現時点では私たちの想像を超えるというのが正直であろう。

#### <文献>

1. ジャック・ヴォークレール：『動物のころを探る』（1996）（鈴木光太郎・小林哲夫訳、1999）、新曜社
2. 木下清一郎：『心の起源』（2002）、中公新書

3. 岸田秀:「性の倒錯とタブー」(『ユリイカ』臨時増刊号, 1971年11月), 『ものぐさ精神分析』84~98, (1982), 中公文庫
4. 小此木啓吾・編集代表:『精神分析事典』(2002), 岩崎学術出版社
5. 立木康介・監修:『フロイトの精神分析』(2006), 日本文芸社
6. 関谷英子:「夫婦の性愛関係・親子関係・子どもの発達」思春期青年期精神医学22(2):94~101, (2013)
7. フロイト,S.:「性欲論3編」(1905)(懸田克躬・高橋義孝, 他訳), 『フロイト著作集5』(1969), 人文書院
8. エリクソン,E.H.(1959):『自我同一性－アイデンティティとライフサイクル』(小此木啓吾・訳編, 1973), 誠信書房
9. 井上芳保・編:『セックスという迷路』(2008), 長崎出版
10. ラプランシュ／ポンタリス:『精神分析用語辞典』(1967)(村上仁・監訳, 1977), みすず書房
11. 和田英樹:『＜自己愛＞と＜依存＞の精神分析』(2002), PHP新書
12. 安岡譽:「人間の性倒錯について」北海学園大学「人間と科学と哲学」研究会第15回研究会・特別講演, (1996)
13. 前田重治:『夢・空想・倒錯』(1985), 彩古書房
14. フロイト,S.:「レオナルド・ダ・ヴィンチの幼少期の思い出」(1910)(高橋義孝, 他訳), 『フロイト著作集3』(1969), 人文書院
15. 福島章:『現代人の攻撃性』(1974), ログス選書
16. サーシャ・ナクト:『マゾヒズム』(1965)(山田悠紀男・訳, 1988), 同朋舎
17. フロイト,S.:「マゾヒズムの経済的問題」(1924)(井村恒郎・小此木啓吾, 他訳), 『フロイト著作集』(1970), 人文書院
18. 西園昌久:「対人恐怖と手首自傷－性同一性障害としての理解」(1983)(『青年期の精神病理』), 弘文堂
19. 大久保善郎, 他:「IDC-10・第V章・草案の日本における他施設共同実施施行」精神医学32(8):869~880, (1990)
20. 梶谷哲男:『三島由紀夫－芸術と病理』(1971), 金剛出版
21. 池田清彦, 養老孟司:『ほんとうの環境問題』(2008), 新潮社
22. 安岡譽:「思春期青年期における家族の諸問題」思春期青年期精神医学6(2):140~146, (1996)
23. 安岡譽:「家族における人間の再生」札幌学院大学人文学会紀要 第85号:35~43, (2009)
24. 若原正己:『なぜ男は女より早く死ぬのか』(2013), SB新書244.
25. 若原正己:「生物学からみた『男と女』」札幌学院大学コミュニティ・カレッジ一般講座(「人間理解学講座第2回:「不思議な『性』をめぐる話」, 第3講講演(2012年11月15日)
26. 若原正己:「ヒト, 人となる－野生動物から人への道すじー」札幌学院大学コミュニティ・カレッジ一般講座(「人間理解学講座」第3回:「人はどこからきて, どこへ行くのか?」, 第2講講演(2013年6月13日)

An essay on the status quo and future change of human existence (sex, gender, and sexuality)  
in the times of iPS cell's creation and it's biological application.

Homare YASUOKA and Tadayuki HASHIMOTO

Abstract

In 2012, Dr. Sinya YAMANAKA (Professor of Kyoto University) et al. were winner of a novel prize in physiology or medicine, by the contribution of "induced Pluripotent Stem cell" (iPS cell) creation.

This epoch-making iPS cell appearance has given a great shock not only to medical areas positively, but also to psychiatric-psychological areas somewhat negatively, because the latter unexpectedly needed to face with a new problem or new perplexing possibility of human nature and future that urges some change of concepts about human sex, gender, and sexuality.

In this paper, the authors have made an attempt to consider and to reconsider the era of iPS cells from the psychiatric-psychological point of view based of our review of traditional understandings of human sexuality. In terms of this context, our theoretical predictive conclusion are as follow :

- 1) The possibility of realization of artificial human (baby) reproduction by the technical use of iPS cell, e.g. same-sex marriage (homosexual couple) or virgin birth (virgin generation).
- 2) The possibility of change of standard concept on two-sex reality (male and female, boys and girls, man and woman).
- 3) The possibility of definitive change of sexual disorders. It's diagnostic criteria and it's treatment may be changed carefully by the concept change of human sex, gender and sexuality.
- 4) For the time being, the human revitalization in the family and family reconstruction will be the most important task of human-being for the sake of protecting human sexual identity confusion.

Finally, the authors has described on the status quo and future change of human existence in the times of iPS cell's appearance and its biological technical application. Some considerations on the theoretical anticipation, namely, the prospect of human-race future has discussed herein.

Keywords: the era of iPS cells, human sex and human sexuality, sexual perversion, gender identity disorder, the future of the human race

（やすおか ほまれ 札幌学院大学大学院臨床心理学研究科，専攻 精神医学）

（はしもと ただゆき 元・札幌学院大学人文学部准教授，

現・香川大学准教授，専攻 臨床心理学）